

第 52 号

# 電気技術史

The History of Electrical Engineering

Newsletter

平成 22 年 5 月 10 日 発行

(社) 電気学会 電気技術史技術委員会 [http://www.iee.or.jp/fms/tech\\_a/ahee/index.html](http://www.iee.or.jp/fms/tech_a/ahee/index.html)

## CONTENTS

- ・ オーラルヒストリーについて 永田宇征 P.1
- ・ 「歴史の窓」マドリッド・リスボン・計量遺産 松本栄寿 P.3
- ・ 訂正とお詫び p.4
- ・ INFORMATION P.4

### オーラルヒストリーについて

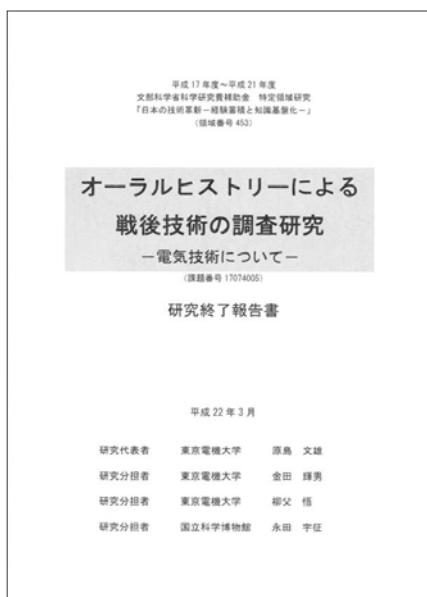
国立科学博物館 産業技術史資料情報センター  
永田宇征

平成 17 年度からスタートした科研費の特定領域研究「日本の技術革新—経験の蓄積と知識基盤化」が、この 3 月に 5 年間の研究期間を終えた。この研究では、わが国を戦後の荒廃から世界第二位の経済大国に押し上げた技術革新について、理工学系の視点から分析することを目的とし、収集するデータの種類の、方法論において多面的に切り込むことを主眼とした。この領域研究は 8 つの計画研究と 20 内外の公募研究から構成されていたが、計画研究のひとつに「オーラルヒストリーによる戦後技術の調査—電気技術について—」と題する研究が含まれていた。5 年間の研究が終わったのを機に、オーラルヒストリーについて思うところを綴ってみたい。



計画研究では、電気技術分野を広くカバーすることとし、電気関連 7 学会が協同して取り組んだ。すなわち、映像情報メディア、応用物理、計測自動制御、情報処理、照明、電気、電子情報通信の 7 学会である。当初 60 人に対するインタビューを予定したが、最終的にノーベル賞、文化勲章、文化功労者等の受賞者を含む 67 人になった。オーラルヒストリーは人文学・社会学系で種々の研究テーマにおいて採り入れられているが、理工系で、このように複数の学会が協同してオーラルヒストリーに取り組んだ例は筆者の知るかぎり、嘗てないことである。その意味でも、この計画研究の齎した意義は大きかった。

オーラルヒストリーという言葉は最近かなり知られるようになったが、耳慣れない向きもあろうかと思われる。この語はコロンビア大学のアラン・ネヴィンスによって 1940 年代に使われ始めたもので、口述史と訳されることもある。その定義は各人各様で



報告書の表紙(全 390 ページ)

あるが、ここではオーストラリアのオーラルヒストリアンであるベス・ロバートソンの定義を筆者が編集したものを記す。すなわち、歴史的に興味のある主題についてその主題に通暁したインタビューイが、インタビュアーの問いに対する答えと言う形式で、自らの直接の体験について語ったものを記録することである。その特徴は以下のようなものである。

個人の体験談を聞き取って記録するわけであるから、当該インタビューイのみが持つ情報を得ることができる。これはオーラルヒストリーを実施して初めて世に現れるものである。得られる内容も学术论文のように、著者の立場で伝えたいことが、無駄を削ぎ落とした形で著わされた無機質然としたものではなく、インタビュアーのリード次第で、結果を得るまでのプロセスや苦労話、失敗談、関係者の心の交流といったドラマまで含まれる場合がある。これはときとして前者に劣らない貴重な情報となり得る。

オーラルヒストリーは著者が自分の価値観に基づいて一方的に語る自伝とは異なり、インタビューイとインタビュアーの共同作業になるものである。インタビュアーの呼び水的質問はインタビューイの記憶の淵に眠っていたものを掘り起こすことがあり得る。一方がそれほど重要ではないと思っていたことが他方には捜し求めた珠玉であるかも知れない。こうして歴史の再構成がなされ、新しい歴史が紡ぎだされる。このようにインタビュアーの発する問いによって、得られる情報が左右されることを思えば、オーラルヒストリーにおけるインタビュアーの役割は非常に大きい。

一方でオーラルヒストリーが本質的にもつ限界もある。語られた内容が客観的に見て全て真実であることは保証できない。人間の記憶は時と共に薄れていく。どのように優れた頭脳の持ち主でも時間の洗礼を免れることはできない。人は完全に客観的立場を貫き通すことは難しい。どのように高潔で公正無私の人でも自らが関係したことには思い入れが強く、アクセントのおき方によってその表現が微妙に異なることはあり得ることである。オーラルヒストリアン、ならびにオーラルヒストリーの文書化された記録を歴史分析に活用しようとする研究者は、このようなことを織り込んだ上で他の史料と併せ読むことにより歴史を読み解いていかなければならない。

筆者は先述の計画研究に携わる以前からオーラルヒストリーに関わってきた。その記録の技術的分析を手がけるには到っていないが、技術開発はどのような営為であるか、ブレイクスルーはどのように起こるか、技術者として備えるべきものは何であるか、といったような技術開発に関わる諸側面が掴めて実に興味深かった。理工系のオーラルヒストリーでは史的事実のみに留まらず、このような情報も得

ることが可能である。

領域研究でオーラルヒストリーの研究が取り上げられたと言うことはオーラルヒストリーの価値が認められたと言うことであり、長年オーラルヒストリーに関わって来た者の一人として嬉しい。さらに、この計画研究の遂行を通じて、参画した各学会にオーラルヒストリーへの理解が深まり、領域研究終了後も独自に継続する動きが見られることは心強いことである。この動きが加速されて、オーラルヒストリーが技術史研究の方法論として一般に認知されるようになれば、インタビューイもインタビュアーもオーラルヒストリーのあり様に対する理解が進むことが期待できる。そうすると、長幼の序を重んずる日本的文化の中で、大先生の前に鞠躬如として臨み、ともするとお説を拝聴するだけで退出してくる、ということになりがちな現在のオーラルヒストリーも形が変わってくるのではないか。そのような流を期待している。



海外調査のひとコマ



インタビュー風景

## 「歴史の窓」

### マドリッド・リスボン・計量遺産

松本栄寿

2008年9月、私は1カ月を欧州で過ごした。心に抱いていた技術史の謎をとこうと、アーカイブスを訪ね、学会に出席し、旧友に会うためであった。ストックホルムの王立科学史センターを手始めに、世界遺産グレメトン無線送信所、ベーン島チョコ・ブラーエ博物館、パリのヒステレコン学会、リスボンのSIC学会、マドリッドのスペイン計量研究所、リスボンの計量博物館、ロンドンのIEEEスタッフ会議とあわただしく走った。

この旅で、マドリッドの計量研究所展示室とリスボンの計量博物館の素晴らしいコレクションに出会った。旅の印象は泊まった宿に左右される。その意味ではいささか片寄るが二つの国の計量の歴史との出会いを記そう。

マドリッドの宿は、ダウンタウンの真ん中。右隣はマドリッド最大の書店、左隣は超高級日本寿司屋。大通りに面したビアホールから街の喧噪を眺めて数日をすごした。スペインは地中海時代の西の大国であり、何度もカトリックとプロテスタントの紛争のもとで、国内でも大虐殺が繰り返された。その歴史のせいか、いささか騒がしい。今でもホテル前の小道を走り回るタクシー、通りは雑踏にあふれ活気に満ちた街である。

スペインと日本は江戸以前に縁はなかった。しかし、南隣のフィリピンは16世紀半ばから300年間スペインの植民地であった。フィリピンの名もスペイン国王フィリペⅡ世の名からとった聞く。当然、度量衡制度も持ち込んだにちがいない。フィリピンではその遺産はどう残っているだろうか。(図1)

ポルトガルは、日本と最初に交流のあった西欧である。1543年の鉄砲伝来、1582年の天正遣欧少年使節は日本人の記憶に深く刻まれている。SIC学会が紹介した宿は大西洋を望む静かな地域にあった。カトリック教団はゴア、マラッカへとアジアまで布教団を送った。さらに南シナ海、琉球をへて種子島に達した。日本へも布教以外に通商を求めようとしただ

ろう。度量衡器も持ち込んだかも知れない。(図2)

リスボンの博物館にも同じ計量器があるか、あるいはかつての植民地、チモールに残っているかも知れない。大学に近い文教地区のせいか、リスボン市内は静謐そのものである。かつての活力を失ってから長い歴史のせいか。旅は私に、スペイン・ポルトガルの計量器とアジアとの関わりをたどる楽しみを残した。



図1 スペイン計量研展示室入口と筆者  
----なかは素晴らしいコレクション----

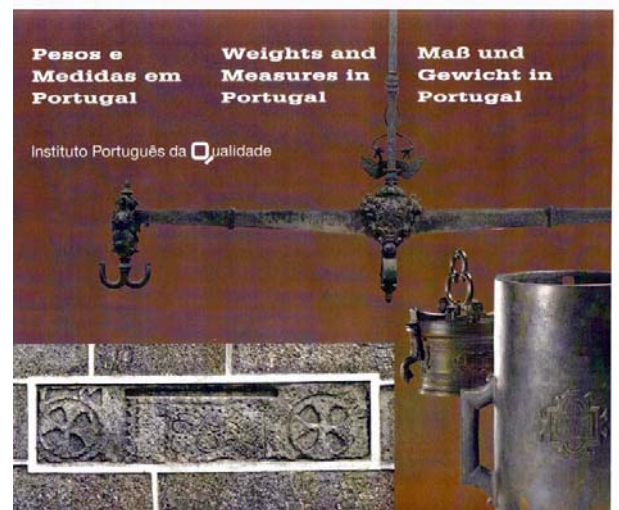


図2 ポルトガル計量博物館カタログ  
----葡萄牙・英語・独語併記----

## 訂正とお詫び

1. 第 50 号 7 ページ左 22 行  
三井恒夫第 2 代委員長のお名前を三木恒夫と誤りました。
2. 第 51 号 3 ページ右側写真  
写真 2 と写真 3 が入れ替わっていました。  
以上 2 件について訂正するとともに、関係者の皆様にご迷惑をおかけしましたこととお詫びいたします。

## INFORMATION

### 1. IEEE マイルストーンの受賞が相次ぐ

IEEE マイルストーンは電気・電子・情報・通信分野において達成された歴史的に重要な技術成果の中で、社会や産業にインパクトを与えた業績を選定し、表彰するものです。昨年から本年にかけて、日本の業績に対する認定が続いています。ここに受賞テーマを紹介します。

- 贈呈式年月 受賞テーマ (対象年/期間) - 受賞者
- 2009 年 5 月 依佐美送信所 (1929 年) - 刈谷市
- 2009 年 10 月 フェライトの発明とその工業化 (1930-1945 年) - TDK・東京工業大学
- 2009 年 11 月 電子式テレビジョンの開発<高柳式テレビジョン> (1924-1941 年) - 静岡大学
- 2009 年 11 月 初の太平洋横断衛星テレビジョン伝送 <KDDI 茨城衛星通信センター> (1963 年) - KDDI
- 2010 年 4 月 黒部川第四発電所 (1956-1963 年) - 関西電力
- 2010 年 4 月 太陽電池の商業化および産業化 (1959-1983 年) - シャープ
- これらにより、日本の認定件数は 14 件になりました。

### 2. 第 53 回電気技術史研究会開催案内

- 〔委員長〕原島文雄 (首都大学東京)
- 〔副委員長〕鈴木 浩 (GE エナジー)
- 〔幹 事〕福井千尋 (日立製作所)、高橋正雄 (東芝)
- 〔幹事補佐〕那須田利昭 (東芝)、戸田明男 (三菱電機)
- 〔プロモーター〕加藤 保 (東日本旅客鉄道)
- 〔座 長〕清水直樹 (日本放送協会)

日 時 : 2010 年 5 月 10 日 (月) 14:00~17:00

場 所 : 電気学会 第 1~第 4 会議室 (東京都千代田区 5 番町 6-2 HOMAT HORIZON ビル 8 F)

協 賛 : 映像情報メディア学会, 照明学会, 情報処理学会, 電子情報通信学会,

テーマ : 電気学会顕彰「でんきの礎」における民生関連対象の技術史および電気技術史一般

HEE-10-007 インバータエアコンに係わるパワーエレクトロニクスの技術史について  
○植杉通可, 温品治信, 遠藤隆久, 山梨 泰, 村重義則, 神戸崇幸 (東芝キャリア)

- HEE-10-008 志田林三郎と多久、その時代  
○志佐喜栄 (多久市先覚者資料館)
- HEE-10-009 電気釜による台所革命  
○岡林親志 (サンコーシヤ)
- HEE-10-010 三菱電機におけるガス絶縁開閉装置の開発・発展経緯と最新技術  
○笹森健次, 望月哲夫, 香山治彦, 貞国仁志, 宮田秀樹, 亀井光仁, 羽馬洋之, 後藤明彦, 越智直輝, 石辺信治, 岸田良二, 中嶋敦哉, 小林 純, 石垣一三 (三菱電機)
- HEE-10-011 東芝におけるガス絶縁開閉装置開発の経緯  
○澄川俊雄, 小林伸光, 下川原直明, 小坂田昌幸 (東芝)
- HEE-10-012 UHV 送電技術史  
○財満英一, 山形芳文, 太田 浩 (東京電力)

### 3. 第 54 回電気技術史研究会論文募集

日 時 : 2010 年 8 月 30 日 (月) または 31 日 (火)

共 催 : 電気学会東京支部

協 賛 : 映像情報メディア学会, 照明学会, 情報処理学会, 電子情報通信学会,

テーマ : 電気技術史一般

申込締切 : 6 月 8 日 (火)

### 4. 技術史関連国際会議案内

The Second Region 8 IEEE Conference on the History of Telecommunications HISTELCON '2010

日 時 : 2010 年 11 月 3~5 日

場 所 : Madrid, Spain

テーマ : A Century of Broadcasting

主 催 : The Spanish Association of Telecommunication Engineers (AEIT), The Technical University of Madrid (UPM)  
<http://www.aeit.es/histelcon2010/>

### 電気技術史 第 52 号

発行者 (社)電気学会 電気技術史技術委員会  
委員長 原島文雄  
副委員長 鈴木 浩

編集人 News Letter 編集委員会  
松本栄寿, 鈴木浩, 滝沢國治, 奥田治雄  
〒102-0076 東京都千代田区五番町 6-2  
HOMAT HORIZON ビル 8F

発行日 平成 22 年 5 月 10 日  
禁無断掲載 Copy right: 発行者